

0. 報告日：2012年 4月 5日（木）	
1. 訪韓期間と場所：2012年3月25日（日）～3月31日（日）、韓国：ソウル・江陵等	
資料 作成 者	<p>（所属、学年） 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士前期課程1年 （氏名） 畑中 信二</p> <p>2. 交流・調査の着眼点 ・人々の生活と都市環境・景観 再開発地区や清溪川などの韓国の先進的な都市環境・景観と河回川や屏山書院などの韓国の伝統的な集落・建築の人々の生活と環境や景観との関わりをみる。</p>
3. 調査記録	
<p>■ 2012/3/25 ソウル市清溪川</p> <p>清溪川は韓国のソウル特別市の中に人工的に作られた河川である。清溪川（写真1）は元は自然の河川であったが、水質汚濁やスラム化などが原因で埋め立てられ高架道路となっていた。しかし2003年に高架道路が撤去され人口の河川として復活した。</p> <p>周辺の高層ビルの立ち並ぶ都市と比べてレベルが下がっていることもあり、少し都市の喧騒からは隔離されている印象を受けた。ソウルは特に高層ビルが多く先進的な都市として発展してきており、人が生活をする場所としてはあまり向いていないように見えるが、このように人</p>	
 <p>写真2 清溪川</p>	 <p>写真1 清溪川</p> <p>工的にであっても車が通らず、自然と人だけが行き来する空間を作るだけで、都市環境はまるで違ってみえることがわかった。</p> <p>清溪川を通る人の中には観光客の姿も多かったが、それ以上にこの周囲で生活している人が多く行きかっているように見えた（写真2）。それは、清溪川が大都市に暮らす人々にとって都市の喧騒から離れる憩いの場として機能していることを表しているのではないだろうか。</p> <p>生活に圧迫感を与えてしまいがちな都市環境に暮らす人々にとって、清溪川のようにちょっとした憩いの空間は、居住環境に対する満足度に大きな影響を与えているように感じた。</p>

■2012/3/25 ソウル市北村

北村では韓国の伝統的な街並みを視察した。北村は写真3からみてもわかるように坂道と小路が多く、大分県別府市の鉄輪温泉地区に似ているように感じた。大きく違うのは、観光客の数と一般住宅のディテールである。鉄輪地区は北村に比べ街にもう少し生活感があり、一般住宅のディテールは鉄輪の原風景を保持しているとはいいがたい。しかし、北村では一般住宅も伝統的な街並みに似せた造りになっており、できるだけ伝統的な街並み雰囲気を壊さないようにしているように感じた。どちらがよい風景なのかは断言できないが鉄輪が観光地として参考にできる点が多いのではないかと感じた。



写真3 北村

■2012/3/26 ソウル市江南地区（再開発地区）

江南の再開発地区では大都市ならではの高層建築を視察した。韓国では緑地の保全のため、開発地域が厳しく制限されているため必然的に高層建築が多くなっているが、江南地区では特に高層建築が密集しており、数キロにわたって高層建築が建ち並んでいた。ソウルは首都なので大企業の自社ビルが密集して建っており、そのほとんどがガラスのカーテンウォールであった（写真4）。



写真4 ソウル

ソウルは首都らしくビジネスマンや観光客の姿が多く見られた。また道のいたるところに写真5のような広告兼情報端末が置かれており、観光客には検索機能の付いた情報端末、ビジネスマンには広告やバスの時刻表を表示する機器として使われており、情報端末が生活の一部として機能していた。



写真5 ソウルにある情報端末

しかし、その多くが故障または一部故障しており、タッチパネルが反応していないものや、ディスプレイが映っていないものもあった。韓国ではたくさんの情報端末が各地に設置されていたが、その多くが故障していて使えず、ただ置いてあるだけになってしまっており、設置よりも維持の重要性を感じた。

高層ビルが多くなると生活する人に圧迫感を与えがちだが、ソウルでは写真のように歩道も車道もかなり広めにとられており、場所によっては建物がセットバックするなどして歩いていてもあまり圧迫感を感じなかった。

また、歩道には表参道ヒルズのように歩道の脇に樹木が植えられており日本でもよく見る風景があった(写真6)。時期が冬であったため緑を感じることはできなかったが、高層ビルに囲まれて生活する人たちにとってこうしたちょっとした緑は大きく影響を与えているのではないだろうか。



写真6 ソウルの歩道

タワーパレスは川を含む自然環境で建設を許されたビルディングだが、タワーパレスそのものと自然につながりはないように見えた(写真7)。

確かに川からみたビルディングは美しく自然環境である河川と、人工物であるビルディングのコントラストは素晴らしいと感じたが、それは景観としてであり、自然環境や



写真7 タワーパレス

都市環境としては全く別々のものである。

しかし、河川環境単体で見ると大分市の平和公園にあるような遊歩道も整備されており、散歩をしている人の姿も多くみられたため、人々の生活の場としては活用されているようだった(写真8)。

今回は河川からタワーパレスを見ただけであったが、機会があればタワーパレス側からみた河川がどのようなものであったかも、確



写真8 遊歩道

認してみたい。

■2012/3/27 江陵 鏡浦台

鏡浦台では亭と再開発をしている湖周辺の緑の都市についての説明を聞いた。

写真にある亭は場所を移してこの場所になったそうであり人々の生活にかかわるような部分を感じることはできなかった。

しかし、亭からみる湖の景観は素晴らしくこの場所を使っている人たちの気持ちを少し味わうことができた（写真9）。

再開発中の緑の都市については、未だ大規模な再開発の初期段階でまだ形をみることはできなかったが、説明を聞く限りでは、すこし都市化の方向性が開発と発展に向きすぎていて、緑そのものの意義が薄くなっているように感じられた。



写真9 鏡浦台

■2012/3/27 江陵 鳥竹軒

鳥竹軒は韓国の伝統的な家屋であり、韓国の通貨の 5000 ウォンと 50000 ウォンに表記されている親子の家である（写真10）。

鳥竹軒は韓国の伝統的な家屋と言うだけあって、韓国の昔の生活をそのまま感じることができた、特にオンドルの煙突の長さを変えて、裏口の煙突は短くすることで煙で燻し虫を寄せ付けないなどの工夫を韓国人の生活をそのままみているような気分にもなった。

家屋の裏には家屋を囲むように森があり、ここにも韓国の風水思想を、強く感じることができた。また庭の中には、当時の学者たちが愛したというさるすべりの木や鳥竹軒の名前のもとにもなった竹などがあり、自然の中に建物を建てて生活しているということが強く感じられた。



写真10 鳥竹軒

■2012/3/27 江陵 船橋荘

船橋荘では韓国の伝統的な家屋に実際に泊まることのできた。

船橋荘で特に目を引いたのが船橋荘を囲むようにある山と塀である。山や塀で囲むことで、この場所に気をとどめているのだ。これも韓国の風水思想からきた家屋の配置の仕方だ、前の鳥竹軒でもそうだったように強く風水を意識していることがわかった。

写真11は主に人が宿泊する場所である。

すべての部屋にはオンドルがあり、実際に泊まってみるとわかるが、現在の床暖房と同等程度の快適性がある。韓国の上流階級の家屋にはほとんどオンドルが付いているが、この設備が昔から韓国人に愛されていた事を肌で感じることができた。



写真 11 船橋荘



写真 12 船橋荘の中の門

左の写真12は船橋荘の中にある門である。門の敷居の部分が浮いているのは雨などによって木が腐るのを防ぐためである。日本であれば敷居を作らないか、そのまま地面につけて設置している。このように浮かしていると経年劣化でゆがみが生じて門と敷居の間に隙間ができてしまいそうだが、これも文化の違いなのだろうか。

下の写真13は船橋荘の全体像である。見てわかるように背後を山と森で囲まれ、さらに山の上には塀が作られている。これは風水思想を強く意識した、家屋の作り方であり、その他の多くの伝統的な家屋に風水思想が取り入れられていた。



写真 13 船橋荘全体

■2012/3/27 安東 三亀亭

この建物は1496年に金兄弟が88歳の母親を楽しませようと建設したものである。この建物のすぐ後ろには風水樹があり、この建物自体も近くにある亭や建物との位置関係から風水思想にのっとり作られている建築物だった。

三亀亭の由来は庭にある亀の甲羅の模様をした大きな岩からきており、楽しませるために作られた亭ということでその造り自体も凝って作られていた。



写真14 三亀亭

■2012/3/27 安東 河回村

河回村は韓国の伝統的な集落の暮らしをそのまま保存している村で、村の背後にある山と、村を囲む河からできた風水思想の有名な集落である。

河回村の集落はすこし沖縄の古くからある村の景観に似ていて（写真16）、少し低い塀や、道の作り方は沖縄と同じであった。

河回村は今まで回った韓国の伝統的な家屋や亭と違い村そのものが昔のままの風景で残されているため、歩いていると韓国の昔の人の暮らしを垣間見ることができ非常に新鮮だった。村そのものだけでなく、生えている木にも風水思想が使われており、韓国の集落構成に風水思想が大きく影響を与えていることがどの建物よりも感じられた。

また、写真17を見てわかるように韓国の集落は近くにある山や川を自分の庭として景観の中に取り入れており（借景）どの建築・集落に行っても建物よりもその外の風景に目を奪われることがあった。

今回は芙蓉臺に上がって河回村を見渡すことはできなかったが、集落を歩くことで集落構成と人々の暮らしの関わりを直にみることができた。



写真16 河回村の道



写真17 芙蓉臺

■2012/3/27 安東 屏山書院

屏山書院は今回の韓国研修で最も韓国の風水思想の建築物の良さを感じることができた建物である。

屏山書院は日本でいうところの私塾に近く、昔はここで多くの生徒が先生から学問を学んでいた。また、現在は韓国の建築を学ぶ学生のメッカとなっている。



写真 18 屏山書院

写真 18 は晩対楼から立教堂を見た

景色である。屏山書院には独特の緩やかな時間が流れており、そこに座って中庭を眺めているとまるで、勉学に励む生徒が見えてくるようであった。

写真 19 は屏山書院の名前の由来にもなった屏山である。屏山書院はこの屏山から借景している。立教堂から晩対楼をみると、その背後に屏山が見える。この晩対楼があることで晩対楼からみる自然のままの姿の屏山と、立教堂からみる生活感のある中庭の奥にある晩対楼越しにみる屏山という二つの景観が生まれている。

屏山書院は学習をする場所として優れていると感じた。



写真 19 屏山

■2012/3/27 安東 俗離山法住寺

俗離山法住寺は韓国唯一の木造の五重塔のあるお寺である（写真 20）。日本の京都にある五重塔と比べると少し低くのっぺりした印象を受けるが、山の中に立地している法住寺の特性から、とても神聖な場所であるという印象を受けた。

日本の仏教建築に近いところも多くみられたが、色の使い方や仏像の顔の作りなどところどころに小さな違いがみられた。



写真 20 法住寺 五重塔

■2012/3/27 釜山 海雲台

釜山はソウルに次ぐ大都市であり多くの現代建築・高層建築をみることができた。一方で写真 21 の商店街のように日本の下町のような景色も広がっており、高層建築と商店街のコントラストかとてもきれいだった。

写真 22 は釜山の I Park 周辺の写真である。ここは海に面して高級マンションや事務所ビルが多く立ち並んでいた。ソウルでは高層ビルは一定の距離をおいて建ち並んでいたのに対し、釜山ではかなりの数の高層建築が密集して建っているためかなりの圧迫感を感じた。しかし反対に高層ビルの迫力を強く感じることができた。



写真 21 釜山 海雲台の商店街



写真 22 釜山

4. 全体の感想と今後の抱負

今回の韓国研修で最も感じたことは、自らの語学力のなさである。今回の韓国研修ではたくさん韓国の学生と話す機会があった。しかし簡単な会話程度の英語しか話せないために韓国の建築や都市計画についての話など自分が話したい、ディスカッションしたい内容について言いたいことが言えないという経験をたくさんした。

次に韓国建築の周囲の環境の捉え方である。韓国の建築は正直日本の建築に比べて細かな細工や技法などで劣る、というよりも少し大味な部分が多くみられたが、反対に日本の建築にはない大胆さを持っているように感じた。特に日本では写真を撮るときに建物の外から建物を撮影するのに対して、韓国では建物の中から建物の外の景観を撮影する機会が多かった。これは韓国の建築が屏山書院でもみられたように、外の景観を借景して自らの建物の一部としてみているからではないだろうか。日本でも一部の建築物でそのような行為が見られるが、韓国の伝統的な建築はほとんどがこれであった。

今後はまず、自分の語学力を磨き、自分の意見を自分の言葉で海外の学生に話せるように努力し、今後一層国際交流に力を入れていくことで、自分自身が国際化の時代を生き抜くためのグローバルな視点を持てるよう努力していきたいと思う。